

あんさんぶるガールズ!

生徒会騒乱編 上巻



Presented by Akira

日日日

原作・イラスト

Happy Elements 株式会社

OVERLAP

あんさんぶるガールズ!
生徒会騒乱編 上巻

OVERLAP

日日日

君咲学院へようこそ!

めいび
風光明媚な自然に包まれた、私立君咲学院。

去年までは伝統ある女子校だったが、
時代の流れから男女共学校になろうとしている。

あなたは、そんな君咲学院に転校してきた、唯一の男子だ。

のほほんとした校風の君咲学院に、
あなたはおおきな波乱を巻き起こしていく。

あなたが巡りあう運命は、奇想天外で、明るく楽しい
充実した学園生活。たくさんの少女たちと絆を紡ぎながら、
あなたは青春を謳歌していく。

君咲学院で巻き起こる波瀾万丈な日常を、
どうか心ゆくまでお楽しみあれ。

CONTENTS

第一部	発端	004
第二部	協力	072
第三部	崇拜	150
第四部	魔王	227

第一部 発端

春。

ちよつとした家庭の事情で、あなたは君咲学院に転入してきた。

入学式の直後といったやや変わった時期の転入だし、去年まで女子校だった君咲学院はあなた以外はすべてが女生徒だ。

あなたは、さすがにすこし緊張した面持ちで——以前に通っていた男子校の制服の襟元を直しながら、あなたの所属する君咲学院二年A組の、教室の扉を開いた。

そんなあなたに気づいて、賑やかな教室の窓際の席で立ちあがる女の子がいる。

「やつほ。よかった、同じクラスだね」

どこか親しげに、穏やかな笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

背の高い女の子だ。柔らかな笑顔を浮かべながら「ひら、ひら」と手をふっている。学年ごとに色分けされた制服は、青——二年生の色だ。

あなたのクラスメイトだろう女の子は、お行儀よく「べこり」と会釈した。

「わたしのこと、覚えてる？ 三波なつみだよ。むかし、よく遊んだよね」

すこし気恥ずかしそうに、俯うつむいている。

なつみと名乗った女の子は、どうやらあなたの幼なじみのようだった。

そういえば、ほんのわずか——あなたは彼女とむかし、仲良しだったような記憶があるようなないような……。たぶん、ほんとうに幼いころなので、記憶は曖昧あいまいだった。

なつみのほうは、あなたをよく覚えてるようで、どこか嬉うれしそうである。

「君がこっちに帰ってくるって聞いたときは、嬉しかったけど。驚いたよ、ほんとにうちの学校に転校してくるなんて」

おおげさに「驚いた！」みたいに手を左右にふっている。

見あげるほどに背が高いのに、どことなく子供っぽいところのある女の子だった。

「うち、去年まで女子校だったからさ、男子って君しかいないんだよね」

なつみは物珍しげに、あなたを上から下まで眺めている。

「だから、みんな君に興味津々だよ。最初のうちはいろいろ慣れないかもしれないけど、困ったことがあったら相談してね」

頼もしげに、なつみが胸元に手を添えて力強くそう言う。

「あら何よ、三波。あんた、そいつ——転校生と知りあいなの？」

間近で、声が響いた。

背の高いなつみに視線をあわせていたあなたは、咄嗟とつさに声の主を見つけられない。

左右を見回して、それから視線を下に向けて――。

そこに、なつみに比べればだいぶ小柄な女の子を発見する。気の強そうな顔立ちの、あまり化粧つけない女の子だった。つんと澄ました仏頂面をしていて、あなたを怪訝けげんそうに「じろ、じろ」と眺めている。

そんな愛想のよくない女の子に、なつみは楽しみに振り向いた。

「うん、幼なじみなんだ」

気安くこた心えると、小柄な女の子に手招きをする。

「あ、紹介するね。うちのクラスの委員長をやってる、堀田ほったさあやちゃんだよ」

「まあ、よろしく」

さあや、というらしい目つきをよくない女の子は、あなたを警戒するようににら睨む。

「ふうん、ほんとに男なのね。まったく、真面目まじめで平凡なのがうちのクラスのいいところに、とんだお騒がせな転校生がきたもんね」

どうも彼女は、あまりあなたを歓迎していないようだった。

けれど、さはさはした性格なのだろう――すぐに肩をすくめて、はにかんだ。

「まあいいけど、迷惑だけはかけないでね。せいぜい、おとなしくしてなさい。うちの学校、変なやつも多いから。目をつけられたら、平和な学校生活なんて夢のまた夢よ？」

さあやが忠告めいた発言をした、その瞬間である。

「あーっ！ いいんちよっ、転校生くんと話してる！ あたしにも見せて見せて！」

癩癩からくま玉のように、大声が弾はけた。

あなたが驚いて見ると、こちらに向かって猛烈な勢いで駆け寄ってくる女の子がいた。

見るからに元氣そうな、身振り手振りのおおきな女の子だった。菜の花のような髪飾りで結わえた草原色の髪は奔放に飛び跳ね、そのリズムにあわせるように「くる、くる」と回転している。

さらさらと輝く両目で、その女の子はあなたの顔を幸せそうに覗のぞきこんでくる。

宝物を見つけた、子猫のようだった。無邪気だ。

さあやが疲れたように、がっくりと肩を落とした。

「さっそく、うちのクラスの変なやつ代表がきたわよ」

「あはは、あたしなんてフツーですよフツー！」

踊るように無意味に回転しながら、『変なやつ代表』と失礼な紹介をされた女の子はあなたを右から左から、前から後ろから楽しそうに観察する。

「うわあっ、ほんとに男ですわねーっ！」

そのまま、大胆にもあなたの制服を「ちよん、ちよん」と引っぱった。

「この制服、前の学校のやつですかーっ？ いいですわね学ラン！ 貸してください！ あたしチア部なんですけど、応援団の格好も憧あこがれてたんですわねーっ！」

「ななちゃん、あんまり制服引っぱったら破れちゃうよ」

呆れたように、あるいは可愛いものでも見るように、なつみが笑った。

そして、しごく丁寧にみんなを紹介してくれる。

「この元氣すぎる子はね、春風ななちゃん。チアリーディング部なんだ。ちなみに、わたしは美術部で、さあやちゃんはバレエ部だよ」

「三人揃って『仲良し三人組』ですよ！ 転校生くんも含めて、『仲良し四人組』になれたらいいですねーっ！」

「ひとを妙な集団に組みこまないでちょうだい」

親しげに、ななと呼ばれた女の子の軽口に、さあやが悪態をついた。

和氣諳々としていて、たしかにこの三人はたいへん仲が良さそうだった。

賑やかな雰囲気なのか、ひとりだけ淡々とした態度のさあやが、思いだしたように。

「ああ、そうそう……。転校生——生徒会長がさ、あんたのこと捜してたから、放課後にも挨拶に行きなさいよ」

しっぽ髪を揺らして、なつみに視線を向ける。

「三波。あんた転校生と仲がいいみたいだから、そいつを校内の案内がてら生徒会室に連れてってあげなさいよ」

「さあやちゃんはテキパキしてるなあ」

話をふられて、なつみはビックリしたように目を丸くしていたけれど。

「じゃあ、そういうことで。放課後、約束ね」

あっさり受けいれると、あらためて——あなたに向き直って。

「これから、よろしく」

花咲くような笑顔で、彼女は言った。

「——たくさん、楽しい思い出をつくっていきましょうね」

* * *

それから。

変わった時期の転校生——しかも男子！ によってクラスメイトたちは色めきたち、やや騒がしい一日になったもの……。

基本的に、あなたが所属する二年A組にはおとなしい優等生が多いらしく（そんなクラスだからこそ、騒動の種になりそうなあなたの所属先に選ばれたのかもしれないが）これといってトラブルなどが発生することもなく、放課後。

転校生の通過儀礼としてクラスメイトたちに質問せめにされ、さらに授業や学校の雰囲気についていくためにきりきり、舞いしていたあなたは、ぐったり疲れていたけれど。

どうにか帰り支度をしながらも、自分の机から動けずにいたあなたに、待つてましたとばかりに歩み寄ってくるものがある。

「やっほ。放課後だね」

三波なつみだ。

彼女はにこやかに、あなたを引っぱりあげるようにして立たせてくれる。

「それじゃあ約束どおり、ざっくり校内を案内するよ」

そして疲れきっているあなたに苦笑しながらも、優しく導いてくれる。

ふたりで、廊下にてた。

「といっても、うちの学校はかなり広いからね。一日で、ぜんぶ廻るのは無理かな。今日は生徒会室までの道すがら、おおまかなとこだけ説明するね」

そういうえば、あなたは生徒会長に呼びだされているのだった。

いったい何の用事なのだろうか——気になるが、今は考えても仕方がない。

「わたしたちが今いるのは新校舎で、ちょっと離れた位置にむかしの校舎——旧校舎が建ってるけど、今はあんまり使われてないの。新校舎の外には他にもいろいろあるから、近いうちに案内したげるよ」

なつみは浮き浮きと、あなたのすこし先を歩きながら。

バスガイドのように、あちこち手で示して丁寧に説明してくれる。

「新校舎は中庭を挟んでA棟、B棟にわかれて、渡り廊下で繋がってる。A棟の奥にプールと体育館があって、この時間——放課後は部活で使われているかな」

その言葉どおり、放課後の校内はにわかに賑やかさを増している。

廊下を歩く他の生徒たち（当然、みんな女の子だ）が物珍しそうに、あなたを見て何やら楽しみに談笑している。すっかり、あなたは注目的のようだった。

その視線にすこし気恥ずかしそうにしながら、なつみが語りつづけている。

「A棟は主に教室があるね、わたしたち二年生は三階。って、これは言わなくてももう知ってるよね。図書室とか音楽室とか、主な特別教室はB棟にあるから、覚えておいて。

生徒会室はB棟の四階だったかな。けっこう地の果てと遠いから、たくさん歩くよ」

いちどに大量に言われてもわからない、慌ててあなたはメモをとろうとする。

それを見て、なつみは苦笑した。

「ああ、ゆっくり覚えたらいいよ。いつでも、案内してあげるから」

どうも、かなり親切な女の子らしい。

説明したり、ひとを導いたりするのが好きなのだろう、足取りは軽く楽しげだった。

「校舎のどこに何があるかは、けっこう詳しいよ——わたし、美術部だから。校内をあちこち移動して、デッサンとかするんだよね。あとこの学校広すぎて、生徒でも迷子になるから、よく案内とかするしね」

そこで不意に、なつみは「……うん？」と眉をひそめた。

「何だろ、窓の外に変なものが見えたような——あつ、あれ見て！ 誰かいる！ あそこっ、窓の向こう、屋上のとこ！」

なつみが慌てて窓際に駆け寄って、飛び跳ねるようにして屋上を示す。その指さした先には——。

「ふふふ！ ふはは！ ふはははははあ！」

やけに存在感のある女の子が、仁王立ちしていた。

かなり遠く——向かい側の校舎、つまりB棟の屋上で腰に手を当て踏ん反りかえっている。風に吹かれて、その艶やかな黒髪がおおきく広がっていた。

でかい声と態度に似合わぬ、ちいさくて可愛らしい女の子だ。

ちいさい。ほとんど、小学生ぐらいなのではないか。顔立ちも仕草もどこまでも幼気。うっかりすると落ちそうなところに立っているの、はらはらする。

穏やかな春の風によつて、その珍妙な女の子の声が、あなたに届く。

「きさまが噂の転校生かあ！」

偉そうな口調だが、どこか舌足らずなので、可愛らしさのほうが勝っている。



「なかなか生徒会室にこないから、待ちきれなくて迎えにきてしまったぞ！」
ちいさな女の子は、誇らしげに真っ赤な腕章を見せつけるように手を広げた。

そこには華美な文字で、『生徒会長』と記されている。

「聞いて驚け見て笑え！ 私こそが！ この君咲学院の偉大なるせえとかいちよお！ 鶴海！ ひまりちゃんのだあーっ！ ふはははは！」

そしてまた、引っくりかえりそうなほど胸を仰け反らせて高笑いするのだった。

聞き間違いでなければ、生徒会長——と名乗ったような。

あんな、ちいさな女の子が？

色分けされた制服によると三年生のようなので、見た目どおりのちびっこではないのだろうけど——あまり、しっくりこない感じだ。

呆然としているあなたの横で、なつみが困ったように窓の向こうに身を乗りだして、ひまりと名乗った生徒会長らしき女の子に呼びかける。

「ああ、生徒会長——こんにちは。そんなところに立ってると危ないですよ？」

「ちよっ、こらっ！ みなみん！ そんな素で挨拶されるとハイテンションで登場した私が馬鹿みたいだろお！」

「……みなみん？」

『三波なつみ』だから『みなみん』だ！ 私は全校生徒の名前をすべて覚えてる！

せえとかいちよおだからな！ えへんっ☆

マシガンのような勢いで喋りまくる生徒会長に、なつみが頬を掻いて言った。

「それはいいですけど、生徒会長。そんな不安定な足場で踏ん反りかえると、バランス崩して落ちますよ？」

「うおわ!? わわっ、落ちるう!? そして今気づいたけど下見るとめっちゃ怖いっ、高い！ ちよっ、みなみん！ 助けて！ 腰が抜けて動けなくなっちゃったのだあ！」

途端に涙目になって、生徒会長は屋上のへりに縋りつき、怯えて震えあがった。その言葉どおり腰を抜かしたらしく、青ざめたまま動かなくなってしまう。

木に登ったまま降りられなくなった猫を見るように、なつみがそれを溜息まじりに眺めながら——あなたに、向き直る。

「ええっと、そんなわけで」

どうしたもんかという表情で、ついでのように紹介した。

「あのひとが、うちの学校の生徒会長だから、覚えておいてね。まあ、忘れたくても忘れられない感じだろうけど？」

それが、あなたとともに恐るべき試験に立ち向かう運命にある、生徒会長——鶴海ひまりとの、あまりドラマチックとは言いがたい出会いだった。



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！